

第三章

中国の残虐な戦争の歴史

一・中国古代の戦争

戦争にいつさいの制限がなかったのが、黄河文明を淵源とする中華文明である。豊かで肥沃な土地である中原に農耕する農民が、戦争に強い騎馬遊牧民に頻繁に襲われ戦争が絶えなかった。時代とともに資源争奪をめぐって戦争は激しくなる一方で、その中原から中国全土に広がったのが中華文明だ。

以下、歴史の記録をたどりながら、いかに中華文明が残酷にして凄惨な戦争、戦乱の歴史を展開したかを見てみよう。

中華文明の始まりは三皇五帝という八人の帝王の伝説として今に伝わる。このうち五帝の堯、舜、禹の時代は理想の時代として語り伝えられている。暴れる黄河の治水が大いなる課題で、この治水工事が堯から舜へ、舜から禹へと引き継がれる。禹以降から夏王朝となるが、第十七代桀王の時、商の湯王に倒され殷王朝となる。そして殷の第三十代紂王のとき、周に倒されて周王朝の時代に入る。周王朝が始まるのが紀元前約千年少し前である。そしてこの周が都を洛邑に移した紀元前七七〇年から紀元前四〇三年までを春秋時代という。そして紀元前二二一年、秦によって中国全土が統一されるまでを戦国時代という。

中国史上、春秋時代はかなり戦争が頻発した時代である。しかし、決して後年ほどには激し

い戦乱の時代とは言えなかった。ことに戦国の時代になってから諸子百家が輩出するなど、学術、思想の活動は自由な時代でもあった。しかしやはり戦争の国、中国である。春秋時代三六七年の間、諸侯の間の戦争は四四八回にも達した。続く戦国時代になってからは戦争の頻度はさらに多くなり、規模も大きくなっていった。大規模な戦争だけでも二二三回に達し、小さな衝突は数えきれない。

そこで、初期の、まだ戦い方に美意識の残っていたころの事例を紹介しよう。日本でも有名な「宋襄の仁」である。春秋時代、前六三八年の泓水の戦いである。春秋五霸の筆頭であった斉の桓公が死んだ後、諸侯の盟主を名乗ったのが宋の襄公だった。宋が鄭国を討ったことがきっかけで、時の大国である、楚の成王と戦うことになる。

楚と宋は泓水を挟んで対峙したが、楚の大軍の前に宋の不利は明らかだった。楚軍が川を渡り始めた。宋の重臣である目夷は「敵が陣を整える前に攻撃しよう」と進言したが、襄公は「君子はむやみに人を苦しめることはしない」としてこれを退けた。結局川を渡りきった楚の軍に宋は大敗し、襄公も矢傷を負って、それがもとで死んだ。当然ながら中国ではその後「宋襄の仁」とは「無用の情け」という意味で使われ、以後このような例はない。しかしこのころ、正々堂々と合戦に向き合う戦い方を美意識で見方があったということにはなる。

中国の戦後時代にあたる紀元前三四一年、戦国七雄のうち魏と斉が激突し、斉が大勝を収めた。世に言う馬陵の戦いである。馬陵の戦いの翌年、弱体化した魏に早くも追い打ちをかけた

のが秦だった。秦の名臣、商鞅は以前から親交のあった魏の將軍、公子卬に書簡を送り、旧知の卬と戦う気はないこと、和議を結んで撤兵したいことを告げた。敗戦直後で国力も充分でなかった卬はこの申し出を喜び、上機嫌で和議の宴席に出てきた。しかしそこに武装した兵士が襲いかかって卬を捕虜にしてしまった。これにより魏はまたも大敗した。

楚もまた秦に振り回された国である。楚の懷王はやはり秦の策略に翻弄されて大敗し、さらに前二九九年にはおびき出されて秦に赴き、そのまま幽閉されてしまう。楚の重臣だった屈原は秦が信用できないことを再三訴えたが、聞き入れられずに左遷され、最後には楚の将来を憂いて入水自殺した。毛沢東は楚の国の人である。訪中の田中角栄にわざわざ屈原の『楚辞』を贈ったことについて、日本の中国専門家たちは、楚の人々のその本心について語らない。楚の国(湖南)は、民国以後、一時「連省自治(連邦制)運動の中心地だった。独自の「湖南憲法」をつくったこともあった。毛沢東も大中華に反対し「湖南独立」と中国を二七国に分轄してそれぞれ独立することを主張したこともあった。毛沢東は青年時代だけでなく、生涯の大半を北京の「中南海」に暮らしながら、それでも中国語(北京語)ができなかった。中国を見ると、楚人の地方性を視点の一つとするべきだ。

秦からは後に始皇帝が出て、史上初の中国統一を成し遂げることになるが、秦の出現によって戦争は苛酷になりいっそう不道德なものとなった。

二. 中国初期の「京観」と「万人坑」のモニュメント

「京観」と「坑」という残酷なモニュメントについて記しておこう。「京観」とは戦争に勝った將領が自らの武功を誇るため、敵の戦死者の屍を大路の両側に積み上げ、土をかぶせて固めた金字塔のことで、武軍とも呼ぶ。

この習慣は古代からすでに見られていた。中国の成立は伝説の祖黃帝の征伐戦争からはじまり、戦争立国から歴史がはじまるのである。そして戦争の常態化は、伝説の堯、舜の時代からだろうから、そのころからすでに戦争における戦意の昂揚、人を殺すことへの胆力をつけ、快感さえ覚えるようにするため、死体を見せつける戦争の風習はすでにあつたようだ。紀元前五九七年、南蛮の楚軍が中原の晋軍を破って大勝利をあげた。このとき楚では大臣潘党が「この武功を子孫に伝えるため、敵の死体で京観を造らなくてはならないと聞きます」と建議したところ、楚王は「昔は大悪の者で京観を作ることが警告となつたが、この戦役で死んだ者は自国の社稷に忠義を尽くした人たちだ。どうして彼らで京観などを作れようか」と言い、晋兵の埋葬を命じている。楚王の思いやりは中国の古代を思わせるが、逆にこの言葉から当時すでに、京観は盛んに作られていたことがわかる。

『史記』には「坑」という言葉がよく見られる。例えば秦の始皇帝は幼少のころ過ごした邯鄲を

攻略すると、かつて自分をいじめた人間を「坑殺」したとある。また四六〇人以上の儒生（儒学者）を「坑」したとも。あるいは項羽が「襄城の守軍を坑殺した」「新安で二〇数万の秦軍の捕虜を坑殺」したともあるが、「坑」はすなわち生埋め（穴埋め）である。

『漢書』には、王莽が漢王朝を篡奪したとき、自分に反対した劉信、翟義、趙明、霍鴻やその親族を全て「坑殺」したとある。同書に掲載されるこの事件に関する王莽の詔書には、これらの死体で「縦横六丈（方六丈）、高さ六尺の京観を築いた」とある。

「坑」の話はひどい。第二章でも述べたが、戦国時代紀元前二六〇年、秦と趙の総力戦があった。「長平の役」で、趙軍四十余万人が秦軍に投降したのだが、あまりに大量の捕虜を一度に処理しなければならず、処置に困った秦将の白起は、一夜で全員を穴埋めに処した。秦は明らかに戦争をより残虐非道のものへ進めた。

長期籠城戦の出現で戦争は残虐化がさらに進む。籠城し「人の骨を砕いて薪にして炊き、子と子を取り替えて食らう」との記録は春秋戦国時代にある。楚軍が宋の都睢陽を囲んだ睢陽の戦、知、韓、魏が晋の都晋陽を囲んだ晋陽の戦を紹介する。

前五九四年九月、楚王の軍は宋の都、睢陽を包囲した。翌年五月になっても囲みは解けず、城内は危急に瀕し、ついに食糧が尽きた。宋の宰相、華元は夜中密かに楚将の子反と会い、子反はこれを莊王に告げた。王は子反に「宋の城内はどういうありさまであろうか」と聞くと、子反は「人の骨を砕いて薪にして炊き、子と子を取り替えて食っている」と報告すると、莊王は「まこ

とにさもあるう。我軍にしても二日分の兵糧しかないのだから」と言い、華元が真実を告げたことで、楚軍は戦いをやめて去った。このときの楚軍の行動は中国古代の美談に位置づけるべきものであり、やはり後世と比べれば美しい。

前四五四～四五三年、趙を滅ぼすべく知、韓、魏の三軍は一年あまりにわたって晋陽（山西省太原）を攻め、汾水（汾河）の水を引いて趙氏の晋陽城に注ぎ入れた。城は水面からわずか三版（二版は二尺）をあますだけで、城中は釜を炊き、子を取り替えて食べた。群臣はみな離反の心をいだき、城主の趙襄子に対する礼もおろそかになった。襄子は恐れて、夜半に宰相の張安談をつかわして韓、魏と内通させた。韓、魏は趙と謀議し、三国で逆に知を滅ぼし、その土地を分割したという記録がある。群臣は離反の心を抱き、襄子も恐れを覚えたということであるから、まだ戦時における人食いも初期のものといえる。

三、侯景の引き起こした「南京大虐殺」

漢代には内戦が少ないため、攻城戦も少なかった。そのため、『資治通鑑』など諸史の中で、天災からくる飢饉に誘発された民衆の共食いの記録は少なくないものの、籠城戦中の市民の共食いについてはあまり記録がない。比較的重要な記録は、王莽の凋落から光武帝劉秀による後漢成立までの過渡期である紀元二三年の宛城の攻囲戦、二三～二五年の長安の戦乱、二七年の薊

城の攻囲戦、さらに後漢の末期から三国時代にかけての一九四年の長安攻防戦、一九六年の雍丘の戦、同年の海西攻城戦等に共食いの記録が見られる。ほとんどが王朝の交替期で起こった戦乱による共食いである。漢代随一の大政論家王充（二七～一〇〇年頃）は、その名著『論衡』の中で、「敗乱のとき、人々は相啖食する」と論じており共食いは当時すでに戦乱中の普遍化した現象の一つになっていたといえる。

しかし漢の時代とて、城攻めして城を落とした側がどう振る舞うかは別だ。紀元三五年、後漢の光武帝は蜀に向かつて出撃した。そして三六年臧宮の率いる大軍が蜀の成都を攻撃、これに対して蜀王公孫述は自ら数万の軍勢を指揮して短時間に三度の合戦に勝利したものの、飯も食う暇もない兵士は疲れ果て、ついに後漢軍によって城門を突破された。城内でも激戦が続いて公孫述は戦死、將軍延岑は降伏した。

かくして翌日、後漢軍による屠城が始まった。まず公孫述の妻子や一族、そして延岑の一族を皆殺しにし、ついで宮殿内、市街において略奪、放火、そして殺人をほしきままにし、城内だけでも一万人以上が殺された。臧宮も、兵士の暴虐ふりを止めることはできなかった。

このような戦いのために食人が横行すれば、危機に際して、妻子を提供してその肉を振る舞うことが美談となる。『三国志演義』で蜀の劉備玄德が戦いに破れて同姓の獵師劉安の家を訪ねたとき、貧乏な獵師であるにもかかわらず潤沢な肉料理を出してもてなしてくれた。翌朝、帰り際にふと厨房を覗くと妻の死体があつたという美談だ。

後漢一九六年、臧洪が妻妾を犠牲にした話がある。彼は東郡の太守として、東武陽（雍丘）を守っていた。軍閥の一人、袁紹の兵に囲まれた。やがて食糧が尽き、救援の部隊もなかった。洪は死は避けられないと観念し、部下を逃がそうとした。だが、武將、官吏たちは泣きながら、逃げようとはしなかった。やがて食物がなくなると、臧洪はついに愛妾を殺し、兵士たちにふるまった。兵士たちはみな泣きすくんで、洪を直視することができなかった。城が攻め落とされるまで、男女あわせて七、八千人が折り重なって死んだ。離反したものは一人もいなかった。後世ではこの臧洪の話は食人の規模が小さかったので、大乱の続く中国では、忠義食人の模範とはなっても、臧洪のことは中国の歴史で忘れられた。

後漢から三国時代にかけての飢饉と戦乱にかかわる食人の記録を見ている。後漢は洛陽を都とした。洛陽は現在の河南省西北部にある西安（長安）と並んで中国の最も著名な古都であり、昔からの兵家必争の地である。周の時代は洛邑と呼ばれていたが、戦国時代から洛陽と名が変わった。後漢の一〇九年と一五五年に、首都洛陽は大飢饉にみまわれ、市民の共食いが発生した。後漢末に洛陽城と長安城が戦乱と共食いによって廃墟となった。三国の魏と西晋の両朝とも漢の洛陽旧城に洛陽城を再建したが、三一年六月、洛陽は劉曜、王弥らによって攻め落とされた。晋の懷帝は、数日間ばはんやりしてなすところなく、洛陽の城中は飢餓が深刻で、市民が殺し合って人肉を貪り、百姓は逃げまわった。十人中八、九人が死んだ。

先に見てきたように、城内の住民大虐殺である「屠城」は中国の戦争文化の一つである。中国

の都市は城壁に囲まれており、敵軍に攻略されれば、城内の住民は逃げ場を失い、掠奪、そして殺戮の対象となるのだ。ここで隋、唐の始まる少し前の梁の時代の、南京の大虐殺を紹介しておこう。

南京は当時、建康と呼んで、梁の都だった。ここで五四八年に侯景の乱が起こる。侯景はもと北魏の守備兵卒の出身であるが、実力者の爾朱榮に用いられ、ついで東魏の高歡が権力を握るとその下に走った。そして高歡が死ぬと東魏に背き、所部の州軍を率いて梁の武帝（在位五〇二〜五四九年）に降った。しかし、梁と東魏との間で南北和議が成立しかけると、不安を覚えて武帝に背いて兵を挙げ、五四八年に都の建康（南京）に迫り、翌年、建康を攻め落とした。武帝は幽禁されて餓死した。そして三年間にわたる大虐殺が始まった。

南京の城壁は岩石とレンガづくりである。三国時代後の晋の時代には二重城壁であるが、南朝の梁の時代には三重の城壁になった。梁の武帝のとき、人口は一〇〇万を超えていた。梁王朝は仏教を崇信する仏教国家で、建康城内には仏寺が多くみられ、僧尼だけでも十万人を数えた。『梁書』によると、武帝のときには長干寺の仏舍利を迎える大法要で、祭りに参加した善男信女は数十万人というから、空前の盛況である。唐末の詩人杜牧の詩の中にも、「南朝四百八十寺、多少の楼台煙雨の中」とあるほど、有名だ。

この建康城の繁栄の夢を破ったのが、武帝に叛旗をひるがえした五四八年の侯景の乱、それがもたらした「南京大虐殺」である。

『資治通鑑』梁紀は、「石頭城（南京城の別称）常平諸倉を食い尽くした後、軍中では食糧が欠乏したので、士卒を放って民間の米穀、財宝、子女を掠奪しまわった。やがて米は一升につき七、八万錢にまで値上がり、人びとは共食い、餓死者は十人中に五、六人もいた」（五四八年）と記している。

また「はじめ、城攻めの日には男女十余万、兵士二万余人があった」「死者は十人中に八、九人で、最後に城内に残った者は四千人にも満たなかった。みな瘦せこけ、街道のあちらこちらには屍が折り重なってころがり、腐汁は流れ出て、槐と柳が植えられている街路沿いの溝を満たしていた」と『資治通鑑』に書かれている。

梁が建康に都を定めた当時、戸数は二八万戸であったが、侯景が反乱して以来、道路が途絶えた。数か月の間に人々がたがいに食いあうに至っても、餓死を免れなかった。生き残ったものは、百人中に、一、二人しかいなかった。このとき、江南は、連年旱魃と蝗害があいつぎ、江州と揚州はさらにひどかった。民衆は流亡し、あいたずさえて山谷、江湖に入り、草の根、木の葉、菱の実を採取して食用した。その結果、至るところで食い尽くされ、死者が野原を蔽った。千里の地に炊煙が絶え、人跡はまれにしか見えない。白骨は積み重なって、丘のようになった。

四、唐の時代は食人文化の最盛期だった

隋や唐は、日本からは遣隋使、遣唐使の印象できらびやかな印象を与えるが、中国の食人文化から見れば最盛期だったのだ。

日本で有名な玄宗帝の八世紀に至って、玄宗末期の安史の乱以後は食人の最盛期でもあった。

このころが食人文化の全盛期であることは、籠城戦で起こった城民の共食いに關する現存の記録のうち、当時のものがじつに三分の一を占めていることから分かる。またそれだけではなく、人肉と内臓が難病治療の漢方医薬として見られるようになったのも、この時代からである。当時は人肉が市場で公然と市販され、さらに民衆を徴用し、その人肉は食糧にされ、黄巢のように人間屠殺加工場の「春磨寨」を大量に設け、あるいは軍隊に「宰殺務」という食用人間を専門に飼育・屠殺する役務を創設している。人間の内臓を取り出し、塩でつめる「塩尸」(尸は屍)も天日で乾かす乾尸などを大量につくり、兵糧に供することも唐宋からだった。華夷のなわばりをめぐるシーソーゲームの中で、農耕民がもつとも悩んでいたのは兵糧の問題である。この問題は近現代になってもほとんど解決できなかった。

唐の七五九年、安祿山の盟友の蕃将史思明が范陽の精兵をあげて魏州を攻め落とし、大燕王と自称した。そのとき、官軍は逆襲して城を囲み、漳水を引いて魏州城に注ぎこんだ。

そのとき城民は子を取り替えて食用に供した。その後、史思明と反目した実子の史朝義は父親の拠る范陽城を囲み、城中の死者は数日で数千人になった。当時、反乱軍によって落とされ

た洛陽周辺数百里四方は「人相食む」状況となり、州県はことごとく廃墟となった。

さらに一世紀後の八八一年四月、黄巢軍が長安市民を屠った。以来、数年続いて長安は共食いの都であっただけでなく、官軍と賊軍の人肉の交易市場にもなった。そしてその首都周辺一帯は、官軍と賊軍が民衆を捕食する狩場にもなったのである。黄巢軍団が特設の「春磨寨」を設け、日に数千の民衆を食ったとある。

軍隊が民衆を捕食する唐末の記録を見ると、例えば八八七年から八九一年の五年間、『資治通鑑』唐紀の中だけでも、以下のように軍隊が民衆を捕食する記録がある。

- ①八八七年六月、「揚州城中は食糧が欠け、きこりの道も跡絶えたので、宣州の軍人はついに民衆を食べ始めた」
 - ②八八八年二月、「李罕之の部隊は、正業を営まずに、もっぱら掠奪で財貨を貯え、民衆を捕らえて食用に供していた」
 - ③八九一年七月、「孫儒は揚州の人家をことごとく焼きはらい、壮年及び婦女を駆り立てて、長江をわたり、老弱を殺して食用に供していた」
- 歴代王朝の軍人が民衆を捕食する諸史の記録は、隋、唐以後から急増しているが、元以後もこの気風は衰えない。

隋、唐とそれに続く五代(後梁、後唐、後晋、後漢、後周)の時代に開花した食人文化は、やがて中国歴代王朝の食人文化の範例となり、それ以後の籠城戦の食人の流儀や要領は、ほとんど

隋唐五代を見習ったものとなった。

日本は仏教、律令制など多くの隋や唐の文化を取り入れたが、遣唐使を中止した唐末の時期は、まさしく中国食人文化の花咲く絶頂期だったのである。

唐が終わり、九〇七年から九六〇年にかけての五代十国の時代、軍中に「宰殺務」の役職が設けられ、専門に「高等哺乳動物」である霊長類の万物の長を飼育し、食用にしたことが伝えられている。「宰殺務」職に関する正式の記録としては、『資治通鑑』後梁太祖の九〇九年の項にみられる。当時、燕の軍閥劉守光が滄州を囲んだため、城中の食糧が尽き、民衆は粘土を食べ、軍人が民衆を食べた。このとき、「呂衰は男女強弱を選び分けて、麴麵で飼ひ、屠殺して軍食に充てた。いわゆる宰殺務という」とある。

因みに後梁太祖というのは弱体化した唐末期反乱を起こした黄巢の配下でありながら、黄巢が不利になると官軍につき、唐十八代皇帝より朱全忠の名をもらいながら、唐を倒して、後梁を建てた人物である。

さらに食人文化にかかわるものとして「攻城」という労の大きい最下策をとらず、「食人」という労の小さい最上の策で敵人の心に恐怖を与え、戦略目標を達成する「食人戦略」も、中国戦史上でよく見られる。

北宋初期の九六三年、中国制覇を目指す宋軍が湖南に南征する際、派遣された李处耘の「食人戦略」は異彩を放つ。宋軍が敖山砦に至るや、敵衆は砦をすてて逃げ去り、多くの兵士が捕えられた。処耘は部下に命じて、体の肥っているもの数十人を殺し、肉を食った。若くて強い捕虜に入墨し、さきがけて朗州に入城するように命じた。彼らが入城するやいなや、『捕虜はことごとく食われた』という噂がたちまちひろがった。朗州の住民は大いに恐れ、ついに火を放ち、城を焼きはらって逃げ去った。

宋の太祖は部下から推戴されて皇帝となり、宋を建国したが、それまでつかえていた五代十国の最後の後周の幼い皇帝とその家族を保護し、太祖の死後帝位は功績のあった弟を太宗として渡した。中国の皇帝としては穏やかな人格であるが、その宋の統一にはこのような食人戦略があった。

五、明代の戦争

宋以後には、火薬、火炮を使用しはじめ、攻城戦は戦略と戦術において一大変革期を迎えた。モンゴル軍は雲梯、そして西アジアから伝来した抛石器の回砲を使い、攻城用の主力武器とした。城の落とし方、攻撃の仕方は変わったけれども、残虐さは少しも変わらなかった。

一二七五年、元の猛将巴延が常州城を攻め囲んだ。このとき帰順した王良臣に命じ、城外の住民を徴発し、土を運んで堡壘を築いたが、人が土を運んでくるたび、土と一緒に埋めていた。そのうえ住民を殺して脂肪から油をしぼりだし、攻城用の大砲の用に供した。

明代は民族政策の上では、中国歴代王朝の中で漢族主義の色彩の最も強い時代でもある。例えば胡語、胡服、胡姓、胡風を厳禁し、重農抑商政策をとった。政治的には徹底的な君主独裁体制を確立した。最高統帥権を皇帝直属とし、官僚の監督を強化し、さらに恐怖政治を実行するため特務機関の錦衣衛を設立し、やがて東廠にまでに拡大発展させた。

元と明の両王朝の食人籠城戦は、ほとんどがこの王朝交替の際に起こり、しかも天災、飢饉がもたらした民衆の共食いと相互に関係し、王朝の崩壊を加速させた。

元末の一三四二年から六二年の二一年間に記録された大飢饉による飢民の共食いは一三年もあったが、食人籠城戦は、仏教の一派で元王朝打倒をかけた白蓮教に希望を託した農民、流民の反乱である、いわゆる紅巾の乱と、その渦中で台頭した張士誠や陳友諒、そしてついに明を建てた朱元璋ら群雄が引き起こした「元末の反乱」の最中に起きた。一三五五年から五七年の淮安、一三五九年の信州、一三六三年の安豊、一三六九年の慶陽等の諸城の籠城戦で起こった城民の共食いなどである。

六. 清と中華文明

満州人の人口は数十万にすぎなかったが、それでも数百倍の中国人を三〇〇年近くも支配した。それは中国史上空前の奇跡ともいえよう。満州人が建てた清帝国は、明帝国の政治的遺産

を継承しただけでなく、中国数千年来の文化遺産を総括し、さらに発展させた。また清代は終末の時期を除いて極めて安定した安楽な時代で、中国人がいちばん幸福に暮らせた時代だった。満州人の三〇〇年近くにわたる中国統治がうまくいったのは決して偶然ではない。中華帝国二千年来の歴代王朝は、明君よりも暗君の方が圧倒的に多かった。ところが清代の二人の君主のうち、幼年で退位した宣統帝は別としても、一人も暗愚な君主はいなかった。それは皇位の継承で長子相続をやめ、有能で有徳の人物に継承させる原則を立てたことによる。これによって中国の伝統である外戚と宦官の弊害を免れることができた。

漢族は黄河中下流域の中原地方に興ってから、ずっと南方へ発展しつづけてきた。しかし明末に至ると、その発展も極限に達し、社会発展は停滞し、衰亡への一途を辿ったのだ。そして明王朝は流賊李自成軍の入京によって、事実上崩壊した。すると女真族の建てた清と戦っていた明軍の將軍吳三桂は、清に降伏し、清を迎え入れる形で李自成の大順王朝を葬り、清帝国の成立となった。

清帝国の満州人は漢人に代わって空前の規模で版図を拡大した。これにより漢人の生活空間は、長城という二千年来の伝統的な北方の防衛線を突破し、北方問題を完全に解決した。中国人が長城を越えて満州に入り、また漠北の草原、東トルキスタンの新疆に流入し、西南の雲貴高原へも進出し、南洋まで流出したのもこの時代からである。中国の人口も数千万から一挙に数億にまで急増したのもこの時代だった。

今日の中国の広大な版図は、完全に清帝国の遺産を継承するもので、清帝国は中華帝国の完成者であるだけでなく、中華文化の完成者でもある。現在の文化、思想、芸術を代表するものもすべて清代で完成されたものののだ。

しかし一九世紀になると、西欧の巨艦大砲によって、ついに清帝国の王朝の土台までゆるがされることになった。それらの前では、中国の伝統的な巨大城郭など役に立つはずもない。

清末になって発生したのが洪秀全の太平天国の乱だが、死者五千万人を出したこの乱は一八五一年、広西・金田村の蜂起で始まった。その二年後の一八五三年には反乱軍は南京を占領して太平天国の国都とし、「天京」と称した。以後太平天国は一五年の間、征戦を繰り返して中華世界を動転させることとなった。

一八六一年六月、曾國藩が率いる湘軍が長江沿岸の安慶城に立て籠もった太平天国軍を囲んだ。このとき曾國藩は清の朝廷に対し、上海の英国領事館を通じて外国商船の輸送と航行を禁止させ、長江を封鎖するよう要請している。『清史』洪秀全載記によると、「城内の守備兵は飢えに耐え切れず、ぞくぞくと城を出て投降した。残る者は人肉を食べて生き延びた」とある。

イギリス人のウィルソン氏も『The Ever Victorious Army』(常勝軍)の中で、「安慶が落ちたとき、すでに官軍の攻囲は三年にも及んでいた。城中の住民は人肉を糧食にあてた。人肉一斤は銅錢四〇文で市場で売買された」と書いている。欧米人による記録として貴重である。

太平天国は湘軍が南京を攻め囲む以前に、すでに内部抗争によって勢力が急速に衰退してお

り、曾國藩の末弟、曾國荃が率いる湘軍五万は一八六四年一月から南京の攻囲を始めた。

日が経つにつれて、城中には食糧が欠乏しはじめ、洪秀全でさえ亡くなるときには雑草を食べて亡くなった。湘軍は南京を攻め囲むこと半年以上経った七月十九日、城壁九か所が爆破され、湘軍が一斉に南京市内に突入した。殺人、強姦、放火、略奪は一か月にわたって行われ、城内から財宝の搬出する車隊は一か月以上も走った。そして南京は一時湘軍の屠殺場となつてしまった。これがこのときの「南京大虐殺」である。曾國藩の腹心の一人で、末弟曾國荃の行動を監視する目付役だった趙烈文が書いた『能静居士日記』は、湘軍のこの「南京大虐殺」について詳しく記述している。

二〇世紀に入ってから戦争は、大砲と機銃が主力となり、火力と機動力が勝負を決める以上、巨城堅城の役割はほとんどなくなり、籠城戦も時代的な意味を失ってしまった。中国の伝統、食人籠城作戦は太平天国の乱で原則的に終わったが、この一八六四年までの一四年間にわたる太平天国の乱は、人類史最大の内乱とされた。

この大乱で、大虐殺をも含めて、総人口の約五分の一も減ったといわれる。同時代人の人口は約四億あったと推定されている。日本で「支那は四億の民、四百余州がある」といわれていた時代であった。

七. 辛亥革命以降の中国

一九〇〇年の義和団の事件を経て、いささか目覚めた西太后は一九〇八年憲法大綱を発表して、九年後に国会を開くことを約束し、立憲君主制を目指した。

だがすでに遅かった。同年西太后が亡くなると、全国に革命の機運が高まった。一九一一年十月十日の武昌蜂起をきっかけに全国二三省のうち、一四省が清王朝からの独立を宣言した。これがいわゆる辛亥革命である。

結成された革命軍は翌一九一二年一月一日、南方の南京で孫文を臨時大總統として選び、中華民国の成立を宣した。これを受けて、清王朝の総理大臣になっていた袁世凱は革命軍討伐に乗り出すことになっていったが、南京革命政府と取り引きして清朝最後の皇帝宣統帝を退位させ、自らは孫文に代わり臨時大總統に就任し、翌年には大總統になる。が、袁世凱は間もなく一九一六年死ぬ。そして孫文も一九二五年「革命いまだならず」の言葉を残して死んだ。

中華民国の北京政府が反抗する国民革命軍に倒されて以後、南京の国民党政府が対外的には中国を代表する政府のように諸外国から見なされることになる。しかし、実態は群雄割拠であり、孫文以降、国民党内各武装勢力がそれぞれ政府を乱立させ、抗争が続く。第二次世界大戦を経て、毛沢東の率いる中国共産党軍が制覇し、一九四九年中華人民共和国を建国する。蒋介石

が引き継いだ国民党政府は台湾に逃れた。

辛亥革命は従来の皇帝に権力が集中する王朝制度から脱皮して、欧米の「国家文明」に基づく国民国家の形を受け入れたものとして評価できる。が、その後の生まれた諸勢力の武力による争いは、従来の中華文明での群雄割拠と同じで、勝つためにはどのような手段を使ってもよいというものであった。手段を選ばないというものであるから、中国国民のための革命といいながら、天民、人民の存在をいささかも配慮しない戦いであった。

古い歴史を遡ると、楚の霸王項羽は、劉邦の「四面楚歌」の計にはかられ、一路南の烏江にまで敗走してきている。「江東の父老にあう面目がない」と自刎した。しかし、越人の孫文はまったく逆である。革命に失敗しつづけても、三度も広州で軍政府を旗揚げし、故郷の広州で大虐殺まで行っている。では、革命浪人孫文はなぜ故郷の広州大虐殺を行ったのか。その理由は、孫文は有力な軍閥とは違って、手持ちの軍隊がなかったからだ。地元の広州で政権を旗揚げするのには、軍隊がないと政府をつくれないので、北方から軍隊と匪賊などの武装勢力を借りて広州に入れる。それは「客軍」と称される。「客軍」はいったん広州に入ると、鉄道など現金収入のある機構などを占領し、広東地方の商人軍、工人軍、農民軍など地方の各自衛の民軍と対立、孫文らは政府を旗揚げするため、商人軍と最新の武器を奪い合い、その結果市民の大虐殺まで発展したのである。天民、人民の生命を守るといふ配慮はなかった。

国民党軍の行った、民に対する蛮行として誰もが認めなければならぬのは、一九三八年六

月に引き起こした黄河決壊作戦である。日本軍の進撃を阻止するのに黄河の堤防を破壊し、人工的に黄河の氾濫を引き起こした。これによって中国の人民が一千万人から一千二〇〇万人ほど被害を被り、八九万人が死んだという。

最後に覇をなした中国共産党軍は「人民」を大切にしたと思う人が日本にはいるかもしれない。しかし、共産党軍も実態は軍閥と同じだった。

一九二七年十一月十日朝、共産党軍は広東市を占領した際に、敵対する軍隊と同じように放火、掠奪、強姦、殺人等あらゆる悪行の限りを尽くした。ところが十三日の朝、他の軍隊が逆襲し、共産党軍を全滅させた。このとき共産党軍のしたことに対する広東市民の恨みは深く、市民は婦人兵を含む共産党軍約二千五〇〇余名を惨殺した。この際、女性の性器を露にするとか、女性器に棒を突き立てるといったような野蛮な行為が行われた。このときの残酷な光景は、当時広東市に在留していた日本人によって撮影されており、それが日本「南京」学会の東中野修道編著『南京』事件研究の最前線(平成十九年版)『展転社 二〇〇七年』に載っている。

国民党軍と共産党軍との戦いは第二次世界大戦が終わってから激しく展開されるようになるが、人命を軽視した戦いは、一九四八年五月二十三日から十月十九日までの一五〇日間に行われて、共産党軍による中国国民党が立てこもる長春の包囲作戦を見るとよい。

このとき、一般市民が脱出しようとしても共産党軍によって追い返された。国民党軍をいっそう食糧涸渇に陥らせる作戦が取られたのである。

これによって共産党軍側の発表で一五万人餓死したとある。近現代になっており大つぴらには食人はなかったと思われるが、一五万人も餓死したとすれば秘かには食人は行われたであろうことは確実だと言つてよからう。

中華人民共和国になって以後、大躍進挫折後の六〇年代初の三年間で、数千万人が餓死したとも推測されている。回顧録を読むかぎり、「村々が共喰い」と多出している。

一九六六年から始まった文化大革命の混乱の中で、人肉が食されたというのはよく聞く話で、これまでの戦乱をめぐる文化ともいえる陋習^{ろうしゅう}から推して、文化大革命期の食人はあったと思うよりほかはない。文革中の「万人食人大集会」やら共産党の幹部の食人記録、中学生の校長食人闘争について拙訳『食人宴席』(光文社 一九九三年)に詳しい。

なお、一九三七年、日本軍が南京を攻略した折、一般市民を不法に殺害したとする「南京事件」が中国共産党政府から喧伝^{けんでん}されているが、もちろんこの事実はない。ところが一九四九年共産党軍が南京に入ったとき、特に資本家を標的にして虐殺、強姦、掠奪があった。中国で度々起こった「南京大虐殺」は、最新では中国共産党軍によって引き起こされたものであった。

国民党の台湾人への弾圧も、人民への無法な殺害事件として指摘しておかなければならない。大東亜戦争(第二次世界大戦)で日本が降伏すると、マッカーサー元帥の第一号命令で、台湾には国民党軍が入ってきて、国民党の施政下に入るが、一九四七年二月二八日、旧日本人たる台湾人との間に衝突が起こり、まだ大陸にいた蒋介石の承認を得て国民党軍による台湾人の

大虐殺が始まった。

わずか二週間で約三万人もの台湾人が殺害され、または処刑された。日本統治の下では想像できない、政権による自らの統治下にある一般人への不法殺害、不法処刑であった。国民党軍の無差別殺人の中で、台湾に残っていた沖縄漁民もわけもわからないまま、巻き添えて二〇〇人が虐殺された。